

フロイトの症例「ねずみ男」に関する考察（Ⅵ）

—「診療録」と「公刊された論文」との対比—

鑑 幹八郎・佐藤 淳 一

まえおき

私たちはこれまで、フロイトの症例「ねずみ男」に関する考察を2003年から続けてきた（Ⅰ－Ⅴ、参考文献参照のこと）。本論文も同じく、診療録と公刊された論文との対比を行い、フロイトが論文を構成していく道筋を明確にしていることを目的にしている。しかし、前回の「Ⅴ」の論文の後、今年まで4年の間隔があいてしまった。その点について、若干の説明をしておきたい。

私たちの研究はフロイトの症例「ねずみ男」の公刊された論文（1909）と偶然に発見されたフロイトの「ねずみ男の診療録」との間には大きな違いがあることを見出して、関心をもったのがきっかけであった。このような関心は私たちのみならず、多くの精神分析関係の研究者には共通してもったものであった。しかし、研究のレベルで見ると、このようなことに焦点を当てた研究は欧米を含めてこれまでのところほとんど出ていない。そこで研究の価値があるということを感じて取り組み始めた。

日本には、「診療録」の訳がなかったので、まず診療録の翻訳から取り掛かりながら、一方で公刊論文との比較研究をする予定で論文を発表することにした。後に示す独文と英訳文と仏訳文とを参照しながら、Ⅰ－Ⅴを発表した。その時点で北山修らのグループで診療録の翻訳が進んでいることを知った。そのため、翻訳の

出版を待ち、それから次の展開を考えようということにして、しばらく中止することにした。

翻訳は2006年に出版された。原本からの翻訳であり、さらに仏訳文の詳細な注も利用して載せられていた。また、症例「ねずみ男」に関する臨床的な考察も付け加えられていた。立派な仕事であった。これが出来ているのであれば、私たちの研究は必要ないだろうと思った。しかし、翻訳を詳細に読んでみると、仏訳文の注はすべて載せられていないこと、また診療録と公刊論文との対比という形で示されてはいないことがわかった。それで私たちの論文の意図つまり、「公刊論文と診療録との対比的研究」はそのまま生きており、研究の続行に意味があるということを確認した。このような次第で、これからはさらに研究を続けることにして、ここに第Ⅵ報を出すことにした。

この対比の作業は公刊論文と診療録との比較検討を行うものであるが、それには二重の意味がある。まず、公刊論文と診療録との文字と文字の対比検討、そしてさらに、公刊論文にされたときに加えられた様々な変更があるのは、なぜかということ进行を明らかにすることである。

第2の側面は、フロイトの追加、削除、変更、ほのめかし、推測など、様々なものがある。これらがなぜなされたかはフロイトの意図を推測するという想像力を必要とする仕事になる。これはきわめて困難であろうが、できる限り事実に基づいて研究を進めたいと思っている。

1. 資料

症例「ねずみ男」の診療録のテキストには、「全集版」独文¹⁾、「ハウエルカ版」独文・仏訳²⁾、「標準版」英訳³⁾がある。「標準版」英訳は、「全集版」独文の英訳ではなく、1955年に Strachey, J. & Strachey, A. によってフロイト全集（標準版）の付録として訳出されたものであり、症例の記録としては初めて発表されたものである。「ハウエルカ版」は、その後1974年に Hawelka, E. R. によって訳出された独文・仏訳の症例の記録であり、手稿の余白や行間のメモや印まで忠実に再現され、膨大な仏語の注釈が付けられている。「全集版」独文は、手稿の転写されたものと「ハウエルカ版」との対照作業を通して、1987年に発表されている。

先に述べたように、本研究の開始当初は診療録の邦訳がなされていなかったため、「標準版」英訳の邦訳作業を試みていた。2006年に北山修（監訳）高橋義人（訳）によって「全集版」（独文）と「ハウエルカ版」（独文）（仏訳）を原典とする記録の邦訳が発表されたので、本稿より邦訳テキストとして準拠する。なお公刊された論文は、これまで通り、「強迫神経症の一症例に関する考察 小此木啓吾（訳）（1983）フロイト著作集9, 人文書院」を参照とした。

2. 「診療録」と「公刊された論文」の対応表

セッション日ごとに「診療録」の内容、それと対応する「公刊された論文」の内容、両者の内容の比較、内容の主たるテーマを表に示した。比較作業については、次のように分類した。セッションの内容が公刊された論文にはほぼ同様に扱われているものを「同様」、セッションの内容が公刊された論文にはほぼ扱われていない場合を

「省略」、セッションの内容が公刊された論文に扱われているものの、明らかにセッションとは異なる内容に変更されている場合を「変更」、セッションの内容が公刊された論文に扱われているものの、明らかにセッションでみられない内容が追加されている場合を「追加」、セッションの内容が公刊された論文に明確に扱われていないものの一部示唆されている場合を「示唆」とした。なおセッションの内容の後には、それぞれ対応する邦訳の該当ページを「著・ページ数」として示している。

今回の論文で扱ったセッションはこれまで検討した続きで、第30セッションから第39セッションまでである。

3. 考察

第30～39セッションの内容と公刊された論文との対応関係を検討してみたい⁴⁾。セッションの内容の多くは公刊された論文で省略されていたが、主として次の点であった。

第1に、母親に関する内容が省略されていた。たとえば、「治療費と母親」（#30）、「母親の分泌物」（#33）、「母親への思いやりと敵対感情」（#35）、「母親への軽蔑とお金」「母親の家族」（#36）、「母親との同一化」「母親が父親を非難する夢」（#37）などである。患者は母親に対して嫌悪感、軽蔑視、敵対感情などを示す一方で、思いやりを見せたり同一化して喋ったり父親を非難するなど、アンビバレンツな関係であったことがうかがわれる。こうした母親に関する話題が論文で省略されている点は先の研究でも指摘した（佐藤・鑑, 2003, 2004）。省略された理由として、小此木（1977）はフロイトが患者の母親への憎しみを否認したのか、さらにはフロイト自身もまた母親への憎しみを否認していたのではないかと推測している。あるいは

表1 第30セッション (1907年12月8日)

診療録		公刊された論文	比較	テーマ
一週間で大きな変化を見せる。お針子とデートしたせいで大いに昂揚感を味わいはした。もつともこのデートの結末は性急なセックスだった。こんなこともあって、間もなくふさぎ込むようになり、ついには治療中に転移を示すようになる。その子との場面で、ねずみ男の警告が頭をかすめ、従妹にももらったタバコ入れからとりだして巻煙草を巻くとき、お針子に触った指を使わないよう心掛けてきたのに、どうしてもその気持ちに逆らって使ってしまうのだという。(記.99)		—	省略	お針子との性交とねずみ男
父親について、そのがさつさについての詳細。父のことを「下品な奴」と母親は呼んでいた。いつも平気でおならをしていたからである。(記.99)		父親の下品な示唆(彼は結婚前下士官だったことがあり、率直な軍人氣質を持ち、軍人時代の生活の名残としてかなり荒っぽい口のきき方をする傾向があった。(著.247))	示唆	父親のがさつさ
治療における転移をもたらしただけで、その一つとして、彼がその重要性に気づいていないとは思えないある誘惑を語った話がある。彼がドクターになって間もないころであった—そのとき彼は博士になって数カ月しかたっていないはずだ。ザボルスキー家のチャヤ・ミンダナ娘—今は17歳になった—と結婚させようとする母親の旧来の計画に結びつくものであった。このことから逃れるために彼は病気のなかに逃避したわけだが、この逃避への道を切り開いたのは、姉と妹のどっちを探るかという幼児期からの選択であり、父親の結婚にまつわる話への退行である。ただし彼にその自覚はない。(記.99)		父の死後、ある日母は、息子に次のような話をした。今母と金持ちの親戚たちとの間で、彼の将来のことが話題になっている。そして、親戚の一人は、もし彼が学業を終えたなら自分の娘をお嫁にやってもいい、こうして会社と縁ができれば彼の職業にも輝かしい見通しが開けるだろう、と話した。このような家族たちの計画を聞いた彼の心中には、自分には貧しい恋人に忠実でいるべきか、それとも父の遺産を踏んで、自分に定められた美しい金持ちの、家柄の良い少女を妻にした方がよいか、と言う精神的葛藤が燃え上がっていた。そして、本来は、自分の愛情とその死後になってもお自分に影響を残している父の意志との間の闘いであったところのこの葛藤を、彼は発病という形で解決したのである。もっと正確に言えば、彼はその葛藤を現実的に解決せねばならないという課題に直面する状況を、発病によって回避していたということが出来る。(著.246)	同様省略変更(ザボルスキー家→親戚)	結婚相手の選択問題と父親の結婚話
父親はつねづね自分に関する求婚話をユーマアたづぶりに語っていた。母親は、「あんたは以前に肉屋の娘に言い寄っていたじゃないか」と事あるたびに父親をからかっていた。“もしかにして父親はザボルスキー一家とつながりを持つことで利得を確保しようとし、そのためにかつての恋人を捨てたのではないか”と思うと、彼にはどうにも我慢できなかった。(記.99)		彼の母は、遠縁にあたる富裕な家庭に引き取られて育った。その家族は、大会社を経営していた。彼の父は結婚と同時にこの会社で就職したが、実のところ自分の妻のお蔭でかなり安定した地位に昇ることができた。こうして彼の両親は、人もうらやむような幸せな生活を送っていたが、この両親の間に交わされた冗談話から、ふとこの息子は、自分の父が母を知るしばらく前に、ある身分の低い家庭の、美しいが貧しい少女に言い寄ったことがあったという事実を知ってしまった。(著.245-6)	示唆	父親の求婚話

彼は私に対してかなりいらちをのらせており、それは、もっぱら耐えがたい苦痛とともに吐き出される罵りとなつてあらわされる。私が鼻をほじくると言つて非難し、握手しようとしもない。こんな汚い豚野郎には徹底的に作法をたたきこんでやらねばならないと思つてやるようで、私が彼に葉書を送つたことや、そこに「親愛なる」と記したことを、あまりに馴れ馴れしい振る舞いだとみなしている。(記.99-100)	われわれが一連の激しい抵抗と手厳しい難言を、忍びに忍んで克服した後、彼は空想的な転移と当時の現実状況とのあいだの完全な類似性という、どうしても信じざるを得ないような事実をものではや否定することができなくなった。(著.247)	示唆	患者の陰性転移
どうやら彼は、症妹のかわりに私の娘と結婚したいという空想上の誘惑に抵抗しているだけでなく、私の妻や娘を侮辱したいという思いとも闘っているようだ。転移がいわんとしていいことを露骨に表現すれば、「フロイト夫人よ、おれの尻をなめろ」ということだ(上流家庭に対する反感)(記.100)	省略	省略	フロイトの妻と娘への転移空想
また彼は、私の娘の両眼が二つの汚物のしみに置き替わっている姿を見るときもある。ということはつまり、彼女の眼にはなく、彼女のお金に魅せられていたというわけだ。リッツィーはとりわけ美しい眼をしているのである。(記.100-1)	「先生(分析医)の娘さんが目の前にいました。ところがお嬢さんは、2つの目を時つ代わりに、2つの大便の塊を付けていました」。夢の言葉がわかる人には、この翻訳は容易であるが、すなわち、「私は先生(分析医)の娘さんと結婚するが、それは彼女の美しい目のためではなく、彼女のお金(持参金)のためです」と。(著.246-7)	同様追加 (フロイトの誇張した解釈=汚物のしみが大便の塊)	フロイトの娘への転移空想
初めの頃には、彼が前の月に16フロローリンどころか30フロローリンも使つてしまつたと嘆く母親に対して勇ましく抵抗していたのに、ねずみに母親のことを匂わせるような部分はない。ここには、明らかに最も強い抵抗が母親に由来しているという事情がある。(記.101)	省略	省略	治療費と母親
ねずみ Ratten と分刺払い Raten とを等置することで、彼は同時に父親のことをあてこすつて楽しんでゐるのである。父親はあるとき友人に「わたしはただの素人だ」というところを「ただの煮え切らないやつだ」と言つたらしく、これを聞いたときは、父親の無教養のすべを表しているようで、恥ずかしくて仕方がなかったそうである。父親は時おり儼然としようと思ひ立ち、これにとともにスバルタ教育が始まるものの、しかしいつもすぐ取りやめになるのであった。母親は生活信条として儼然と心得ているがたがたし気楽にのんびりと暮らせる家庭の雰囲気が大切だと考えている。ランツァーが友人をひそかに援助するのも、自分を父親と同一視するところからきている。父親は最初の間借り人ー父親はこの間借り人の家賃を立て替えてやつたー一に対して、他の人に対して、同じようにわけへだてのない態度で接していた。そもそも父親は実際まことにあけすけとてもユーモアのある男であつた。普通なら父親のこうした点は高く評価してよいとランツァーは考えている。それでもやはり、あまりに洗練された彼の繊細な感性からして、父親の兵隊根性丸出しの単純さを恥ずかしく思っていることは言うまでもない。(記.101-2)	彼らは結婚前下士官だったことがあり、率直な軍人氣質を持ち、軍人時代の名残としてかなり荒っぽい口のきき方をする傾向があった。(著.247) 誰の墓石にも故人の生前の徳を刻みつけるのが習わしであるが、彼の長所は、率直さのあるユーモアと周囲の人々に対する親切さであつた。(著.247) しかし子供たちが成長すると、彼は他の父親たちと違って、侵しがない権威の座に就こうとせず、むしろ気立てのよい率直な態度で、自分の個人生活の小さな失敗や誤りをもそのまま子どもたちには知らせていた。(著.247)	示唆 (患者の見方と いうより、父の 客観的描述、し かも肯定的)	父親の性格

表2 第31 セッション (1907 年 12 月 9 日)

診療録		公刊された論文		比較	テーマ
あのお針子に夢中になっているせいか、快活で－臍舌だ－ (記.103)		－		省略	お針子との関係
そこで言語新作をともなつた夢。WLK (ポーランド語) の参謀本部地図、どういことが明日にでも調べてみなくてはならない。Vielka=「老いた」。L=ランツァーだとすると、GL は glejsamen すなわち Gisela Lanzer の略語だ。(記.103)		－		省略 (暗号解読はやや強引)	造語 WLK をともなつた夢

表3 第32セッション (1907年12月10日)

診療録	公開された論文	比較	テーマ
彼は夢の全貌を打ち明けてはくれたものの、自分ではその内容を全く理解していない。他方で、WLKについていくつかのことを語っている。私の推測するに、WCはトイレのこのことなのだろうが、確証はない。これにひきかえ、Wというのは、姉妹の誰かが歌う「私の心は悲しみでいっぱい」という歌で、これを聞くと彼はとても滑稽に感じて、どうしてもラテン字体の大文字のWが浮かんできましてしまうそうである。(記.104)	-	省略 (夢へのこだわり、=現実的)	造語WLKをともなった夢
強迫に対する彼の防衛の常とう句は、強調して発音される「Aber」という語であり、最近では(治療を受けるようになってからか?)「Aber」を強調して発音するという。黙音のeでは、外からの侵入してくる者に対して身を守るのに十分ではないので、にせのアクセントでこの音節を強めれば大丈夫だろうと思ったという。ところで、今ふと思いついたことがあると彼はいう。「Aber」に欠けていたwがWLKという言葉にあったところからすると、この「Aber」は「Abwehr」を意味しているのではないか、ということである。(記.104)	われわれの患者は、防衛方式として、とっさに「しかし」aberという言葉を早口に発音し、それと同時に手で否定する身振りをした。ある時彼は、この方式が最近変わって、自分自身はもはやaber(アーベル)といわずにaber(アペール)と言うと語ったのである。この方式の変化の理由を訊ねられて彼は、第二音節の無音のeに、何か自分にとって外来的ものや反対のものの侵入してくる不安を感じるからであって、どうしてもこの不安が防げない、だから自分はこの不安を防ぐためにeにアクセントを付ける決心をしたのだと述べた。しかし完全に強迫神経症の様式に組み込まれたこの説明も、実は不十分なものであることがわかった。それはせいぜい、そういう理屈付けの承認をわれわれに求めるだけのものではあった。実際には、後者の「しかし(aber)」は、彼が精神分析に関する理論的な話題のうちから学んだ言葉である防衛Abwehrに、わざわざ釣り合わせてこしらえたものである。(著.264)	同様 (精神分析的用語が面接の中でも使われていた?)	防衛のための呪文
彼の常套句に「Gleisamen」という言葉がある。この言葉は、彼が幸せな状態にいたるとき、このまま変わらずにいってほしいと思うものすべてを呪縛するために用いられてきたもので、もうずいぶん長いあいだ役に立っていているのだが、しかし、敵対する可能性、つまりは反対のものに転化する可能性を持っているという。そんなわけで、彼はこの言葉をもっと短縮しようとして一理由は不明だが「Wie」という短い言葉で置き換えたのだそうである。(記.104)	彼女の名前には一つのSが含まれていた。彼はこのSを呪文の最後すなわち付け足しのAmenをすぐ前に置いた。したがって彼は-こう言うって差し支えなければ-彼の精液Samenを、愛している恋人につけたことになるのである。すなわち観念の中で、彼女自身を相手に手淫していたわけである。(著.264-5)	示唆 省略	呪文の短縮
Kというのは、vielka=「老いた」のKに当たるものだという。しかもこのKは、学校でKの文字が質問された時に感じた不安を思い起させるそうである。彼のLがその間近に控えていたからだ。だからこのKという文字は、「KがLのあとにやってくるれば、そのときもうLは過ぎ去ってくるのに」という願望に対応しているのだという。(記.104-5)	-	省略	造語WLKの意味
治療中の転移はかなり緩和してきている。私の娘に出くわすのではないかとひどく不安を感じているが。(記.105)	-	省略	転移空想
彼は何とも無邪気なことに、自分の睾丸の一つが身体の中に入ってしまったまずっと降りてこない、と語る。ただし性的能力は極めて良好だとのことである。彼は夢のなかで、ある隊長に挨拶された。その男は右側にだけ階級章を付けていて、しかもその三つ星の一つが垂れ下がっていた。これについては、いとこの手術との類似性。(記.105)	-	省略	睾丸の停留と大尉の夢

表4 第33セッション (1907年12月12日)

診療録	公開された論文	比較	テーマ
彼の汚らわしい転移は依然として続いており、だんだんふくらんできている。彼が嗅覚の鋭い男だということがわかってくる。思春期の頃には、人がどんな服を着ているかが匂いで識別できたりした。家族の匂いなるものがあるのだという。しかも彼は、女性の髪の毛の匂いを嗅ぐだけで快楽を感じたそうである。(記.106)	私は、われわれの患者が嗅覚の鋭敏な男であることを知ったことが、彼の主張するところによると、幼児期の彼は、失のよう人間一人一人を嗅ぎ分けたということである。大人になつてからでさえも、嗅覚による知覚は他の全ての知覚に比べて遙かに多くのことを知らせてくれたそうである。(著.281)	同様省略 (女性の髪の毛の匂いへの快楽)(女性の一体化願望)	嗅覚の鋭敏さ
つづいて明らかになってきたことがある。彼の内には自分では意識していない格闘があり、これが彼に病をもたらしたのだが、彼は従妹に対する愛情を鈍鈍のほうへと移動させることで、この無意識的な格闘の転移を自分のために造り出したのである。そうしていま彼は、このお針子と、格闘な上流階級たるわが娘とを競わせているのである。お針子に対する彼の勢力は驚くべきものである。(記.106)	-	省略 (愛情と生理的レベルでの性の分離?)	従妹からお針子への愛情の変遷
彼は今日、大胆にも自分の母親を激しく罵った。ずいぶん昔の記憶らしいが、ソファに横たわっていた母親が立ち上がったとき、彼女がスカートの下から何か黄色いものを引っ張り出し、それを椅子の上に置いた。彼がそれに触ろうとして、あまりの気味の悪さに総毛立った。後になって、それは彼の記憶の中で分泌物となった。このことから、私の家族の女性全員がいろんな種類のむかむかするほど汚い分泌物の海の中で窒息している、という内容の転移が生じているのである。女性はずべて不快な分泌物をもっているのだと彼は思い込んでいたの で、自分の二人の愛人にはそうしたものが無いのを発見してとても驚いた。母親は下腹部の病を患っていた。そして今は生殖器から嫌な匂いを放っている。これは彼にしては耐えがたく、いまいましくて仕方がない。母親自身の言うところによると、あまり風呂に入らない時には臭うけれども、そんなにひんばんに風呂に入るわけにはいかない、ということである。これ を聞いて彼はぎよとす。(記.106)	-	省略	母親の分泌物と女性への不快な転移空想
彼は子供に関する二つのすてきな話をする。一つは、サンタクロースが大好きな5つか6つの少女の話である。少女が薄眼を開けて眠ったふりをしているとき、パパとママが林檎と梨を靴や靴下に詰め込んでいるの見える。翌朝、彼女は、住み込みの女性家庭教師に、「サンタクロースなんていないよ。パパとママがサンタをやっていたんだ。もうそんなもの全然信じていないもん。コウノトリだって信じていないもん。だってそれもパパとママがやっていたんだから」と言う。(記.106)	-	省略 (外的な観察の正確さ)	子どもの脱錯覚の話
もう一つは、7歳になる彼の甥の話である。少年はとても臆病で、犬をこわがっていた。あるとき彼の父親が少年を叱って「2匹の犬が来たらどうする?」と言うと、少年は「2匹ならこわくないよ。だって、そいつらお互いにお尻をすーっと嗅いでいるから、その間に逃げちゃえばいいんだ」と応える。(記.106)	-	省略 (外的な観察の正確さ)	子どもの性的な話

表5 第34セッション (1907年12月14日)

診療録	公開された論文	比較	テーマ
女の子との仲は順調である。彼女の飾り気のなさが気に入っている。セックスでは精力がみなぎっている。(記.108)	-	省略	お針子との関係

その一方で、軽度の強迫観念を訴える。そこから次のことが明らかとなる。すなわち、母親に對する敵対的感情の流れが存在すること—ちなみに彼はいま母親に對して過剰なまでの思ひやりを持って接している—、この敵対的感情の流れは、かつて母親がしつつけの時に口やかましく、とりわけ彼の不潔さに關して叱責していた事実に由来すること。出た話は、母親がげづおをすること、12歳のときに、気持ち悪くものが食べられないと文句をいったこと。(記.108)	省略 (母とのアンビヴァレントの關係)	母親への思ひやりと敵対的感情
---	------------------------	----------------

表6 第35セッション (1907年12月16日)

診療録		公刊された論文	比較	テーマ
お針子と一緒にいると、「セックスするたびに、従妹にねずみを1匹と考えてしまう。これは、ねずみは何か数えられるものである、ということを示している。この文は、好意と敵意といふ二つの感情の流れの妥協として成立しているのである。そうであるなら、a) お針子との毎回のセックスはそのつと彼に従妹とセックスする可能性をもたらし、b) 毎回のセックスはそのつと従妹の意に反して行われ、従妹を怒らせるはずのものである。こうしたイメーজは、明瞭で自覚的な観念・空想・譫妄・強迫観念・転移などから組み立てられている。(記.109)	省略	-	省略	お針子との性交とねずみイメージ
ねずみの話については、「ぞっとするような」体験がある。まだ彼が発病する前、鼠のような動物が父親の墓のそばを走り過ぎるのを見たことがあった。これはしばしばそこに出没する野イタチの一種だった。どうやらこの動物は父親のところに食事をしにやってくるらしい、と彼は推測した。死後の生についての彼の観念は、無意識の内部では、古代エジプト人と同じように一貫して唯物論的である。(記.109)	同様 変更 (フロイトの想像力の産物：ネーグティヴィイメーなど)	かつて、父の墓に詣でたとき、彼は大きな動物がお墓の丘のかたわらを走り過ぎるのを見たことがあった。彼は、それが鼠だと思った。彼は、その動物が父の墓から飛び出してきたのだ、ちようど父の死体を食いあさってきたところだと思った。鼠という表象から切り離すことのできないものは、この動物が鋭い歯でものを噛み、食いちぎるという習性である。(著.258)	父親の墓とねずみのような動物	
これに関連して、ネメチェック大尉からねずみ話を聞かされたあとで生じた幻覚がある。あれはたかも土中に鼠がいるかのように彼の面前で土が盛り上がる、という幻覚である。彼はこれを何かの前兆とみなした。彼によると、こんな風に関連しているとは思ってもみなかったという。(記.109)	省略 (幻覚の発生と現実経験との関連)	-	省略	ねずみに関する幻覚

表7 第36セッション (1907年12月19日)

診療録		公刊された論文	比較	テーマ
彼の答が明らかになる。父親が自分の愛する人を捨てて母親と結婚したのは、物質的な利得が目当てだったからだと確信している。この確信の拠りどころは、結婚持参金よりも母親とザボルスキーケとの縁故関係がもたらすコネの方が大事だったのだ、という母親の話にあるのかもしれないが、ともあれ、この確信と、軍隊時代における父親の窮乏の記憶がいま一つて、人を犯罪に走らせるような貧困を彼は嫌悪するようになる。(記.110)	同様	彼の母親は、遠い親戚の子が預けられる形で、大きな工業企業を経営する裕福な一家で育てられた。彼の父親は、結婚と同時にこの会社で働くようになった。そのように、まさに結婚相手を選んだことによって、大変裕福になったのである。素晴らしい結婚生活を送っている両親の間で交わされた冷やかかしから、息子は、つましい一家の貧しいけれどもきれいな娘に父親が言い寄っていたことを知った。これが前史となった。(著.224)	両親の結婚にまつわる背景	

こんなわけで、彼は母親を軽蔑していれば満足なのである。かくして、愛する人を裏切ってはならず、と彼は俟約を始める。しかも自分の全財産を母親に譲り渡してしまう。母親からは何のほども受けたくないからだ。いっさいのお金はもともと母親のものなのであり、そんなお金では祝福は得られないのだ。(記.110)	-	省略 (なぜ、怒りが母にいくのか?)	母親への軽蔑とお金
自分の資質の悪い面はすべて母親から受け継いだものだ、と彼は言う。母方の祖父は粗大な男で、自分の妻を虐待していた。彼の兄弟姉妹はみな、あしき子どもから立派な真人間に大きく変貌を上げた。ただし兄弟の一人は大して変わらず、成金になったにすぎない。(記.110)	-	省略 (父の価値の講義り? 現実肯定的出来事が多い)	母親の家族

表8 第37セッション (1907年12月21日)

診療録	公開された論文	比較	テーマ
その振る舞いや治療中の転移の面で、母親に自らを同一化している。振る舞いについていえば、一日中くだらないおしゃべりを、わざわざ兄弟姉妹の誰に対しても嫌なことを言うとうとする、叔母や従妹について辛辣な批評をする、などがある。転移に関しては、私が何か述べれば「わかりません」と言ってみよう、と思う気持ちがある。考えている内容としては、「Parchに20クロローネで十分だ」など、その他にもいろいろある。同一化のこのような構造を彼も認め、その証拠として、従妹の家族に対しても母親と同じような言葉遣いをしてしまおうという点を挙げる。おそろく彼は、父親を批判する際にも母親と自分を同一視しており、このようなたちで両親の反目を自分の内部で続行しているのだろう。(記.111)	-	省略	母親との同一化
彼が持ちだす(むかし見た)ある夢では、父親を嫌悪する理由として、彼の理由が母親のそれに擬せられて語られる。「父が帰ってきた。だからと言って彼は全く不審に思わない(願望の強さ)。彼はある意味で大喜びしているのだ。母が非難めいた口調で「ハインリヒ、どうしてずっと連絡してくれなかったの?」と言う。彼は「これで一人分の家計費が増えたのだから、なんといってもこれからは節約しなければならなくなる」と思う」。彼のこの考えは、自分が産まれたときに-新しく子供が産まれるといつもそうだったが-父親が嘆いていたという話を聞かされたことへの復讐である。(記.111)	-	省略	父親を非難する母親の夢
この背景には、次のような別の事情がある。父親は人に頼られるのが好きで、まるで自分の力を乱用しようとするかのように頼みごとを喜んで引き受ける男だった。もともと美のところは、すべてを動かしているのは自分なのだ、という喜びを満喫していただけたのかもしれない。母親の発言は、彼女が語ったある話と関連している。彼女が田舎に行っていたとき、父親がめったに手紙をよこさなかったで、ウィーンに戻って父親を探し回ったことがある、という話である。要するに彼女は、自分が受けたひどい扱いへの不満を訴えたわけである。(記.111)	-	省略	父親の自分勝手な性格に対する母親の不満

表9 第38セッション (1907年12月23日)

診療録	公開された論文	比較	テーマ
彼は、父親に似た性格の無骨で誠実な男、St.博士がつい最近発病したことによってショックを受けている。自分の父親が病氣だった時と同じようなつらいいい思いを味わっている。ちなみに病は同じ肺気腫である。(記.112)	-	省略	家庭医St.博士の病氣

ところで、彼の嫉妬は純粋とはいえず、復讐心が混じっている。これについては、St. がもう死んでいるという幻想にとらわれることがある点からして、彼も自覚している。仕事から引退して休息をとるよう博士が父親に積極的に勧めなかったことで、彼の家族は博士を長らく非難してきたが、彼の復讐心はここに由来するのかもしれない。ねずみにによる制裁が博士にも及ぶことになる。(記.112)	-	省略	家庭医 St. 博士への復讐心
この話の最中に、彼はあることをふと思い出す。死の数日前、博士がこんなことを語ったというのである。すなわち、博士自身が病気に罹っており、どう見ても手の施しようがないのでクワイスラー博士に治療を任せているが、親友だったので身にとまされる思いだ、と。(記.112)	-	省略	家庭医 St. 博士による父親の治療
これを聞いたとき、彼は「ねずみたちは沈む船を見捨てるのだ」と思った。- 彼は、自分が望めば St. は死ね、自分が St. を生かしてやっているのだ、と考えている。つまり、自分は全能だという観念である。事実、彼は自分の願望の力で従妹を生き永きえさせてやったことが二度あると思う。一度は彼女が不眠症にかかっていた去年のこと、彼が一晩中眠らずにいると、実際に彼女はその夜初めてぐっすり眠れたのである。もう一度は従妹が発作を繰り返して、息を口にして、気を失くさせておくことができたという。彼女はそんな状態にあっても彼の言葉に反応したというのである。(記.112)	-	省略	従妹への看病と患者の全能感
彼の全能の観念はどこから来るのか。私に思いあたるのは、初めての身内の不幸、つまり、カミーラの死である。これについて、彼の中に三つの記憶が存在する。まず最初の記憶だが、彼はこの記憶に訂正を加え、敷衍して次のように述べる。彼は、カミーラがベッドに連れていかれる様子を見ている。ただしパパによって連れていかれたわけではない。なおこの出来事は、彼女の病気が判明する以前の出来事である。なぜなら、パパが彼女を叱りつけ、彼女が両親のベッドから引き離されるからである。実際、カミーラは随分前から疲労を訴えていたのに、誰も気にとめなかった。St. 博士が彼女を診察したとき、博士は着ざめた。彼は悪性腫瘍(?)と診断した。事実のちに彼女はその病のために死んだ。ところで、その死に際して彼がどのような罪悪感を感じたかという可能性を私が論じている最中、彼はこれに関連して別の話題を口にする。(記.112-3)	彼が3歳から4歳の間に起こった出来事であった姉の死は、彼のさまざまな空想中で大きな役割を演じ、その頃の幼い的な悪行と内的に密接に関連していた。(著.272)	省略 示唆	亡き姉カミーラの死の記憶
それ以前に全能の観念についての記憶が彼にないという点で、この話題もまた重要である。彼が20歳の時、ランツァー家は一人のお針子を雇い入れた。彼はお針子に何度もいいよつたのだが、しかし本当は彼女を好いていたわけではなかった。そのお針子はいえり好みも激しく、相手に過剰な愛着を求めた上、自分は愛されていないと不平を訴える女性だったからである。お針子はあかさまに「好きだ」と彼が明言するよう挑発したが、彼はそれをきっぱりと退けたため、自暴自棄になってしまった。数週間後、彼女は窓から飛び降りた。彼がそのお針子と関係をもっていたら、彼女はそんなことはしなかっただろう。このように、誰かを幸せにする力を持っている者であれば、愛を聞きたいだけ振り回すことで自分の全能を発揮するのである。(記.113)	もう一つの体験は、愛に飢えたハイ・ミスに関するものである。その夫人は彼に大変好意を寄せ、一度は、「私を愛することができないか」と彼に直に聞いたことさえあった。彼は逃げ口を言った。二、三日後彼は、その夫人が窓から落ちたことを聞いた。そこで初めて彼は自分を責め、「もし自分が彼女を愛してあげたのなら、彼女を生きたままにさせることができたのに」と自分に言い聞かせた。そんな具合で彼は、自分の愛と憎しみの全能を確信するに至った。(著.271)	同様 変更 (ランツァー家のお針子→ハイ・ミス)	お針子の自殺と患者の全能感
その翌日になって-彼の言うには-以上のこと明らかになったあたでも後悔を感じていない自分に驚いているが、しかしともかく後悔の念はすでにあったと思う(素晴らしい!)。(記.113)		省略 (罪悪感のテーマ)	お針子への後悔の念

<p>こうした彼は、自分の強迫表象を順に追って語り始める。</p> <p>第一の強迫表象は 1902 年の 12 月にさかのぼる。あるとき彼は、“所定の期日にきちんと試験を受けなければならない”、そんなことをふと思いついた。実際に試験が行われたのは、1903 年の 1 月である（叔母の死後のことで、悪しざまに言った父親に対し、かっとなって非難の言葉を浴びせたあとのこと）。そんな思いにつき運ればせの動機さであることは彼自身よくわかっている。父親がいつも気に病んで心配してくれていたのは、彼に動機さが足りなかったからなのだ。そんなわけでは、”こんな生き方を続けていったら、自分の意中のせいでいずれ父親の身に災いがふりかかるだろう”と考えようになる。この思いはいまも変わらない。彼の神経症のすべてを支える前提は、このように父親の死を認めまいとする気持ちにあるのだ、と私は彼に指摘する。（記.113-4）</p>	-	省略	強迫の起源：所定の期日に受験する觀念
<p>1903 年の 2 月、すなわち、つきあいの薄かった叔父の死後、あらためて自責の念が湧きおこる。というの、あの夜に自分は寝ていたからである。絶望感にさいなまれ、自殺を考えるが、自分の死を思うとぞっとする。いったい「死ぬ」とはどういうことなのか？まるでこの「死ぬ」という言葉が、「何も見えず、何も聞こえず、何も感じない状態ほど恐ろしいものはない」と彼に否定的に語りかけてくるようではないか。推論の誤りに彼はまったく気付かぬまま、“あの世は間違いない存在する、魂の不死もあるに違いない”という想定を立てることで、彼はこの思考から抜け出したのだった。（記.114）</p>	-	省略	自殺と死の觀念、死の恐怖からの脱出
<p>1903 年の夏、モント湖を渡る船上で、突然“湖に身を投じよう”と思いついた。オルガと一緒に、彼女が夢中になっっているボラック博士を訪ねた帰りだった。“父親のために自分に行きたくない”とあれこれ考えていたところに、まず最初に“父親の身に何も起こらないようにするために、お前が水に飛び込まなければならぬとしたら・・・？”とう仮定法的な思考が生じ、その次にすぐ“飛び込み”と促す勧告が生じたのである。父親が死ぬ以前に、父を救うためにすべてを犠牲にするつもりはあるのかどうかと思ひ悩んでいたときと、言葉遣いまでそっくりだった。そう考えると、おそらく同年の夏に二度目の冷たい仕打ちをみせた従妹と比較してみてもよいだろう。当時の彼の憤りはものすごかった。ソファに寝転んでいて急に“あいつは売女だ”と思ったこと、そう考えてきよとしたことを彼は記憶している。彼は似たような憤りを父親に対しても覚えたのだが、この罪を償うべきだったの思いはもはや疑うべくもない。彼はその当時すでに、父親のことを案じたり、従妹のことを案じたりと、気持が定まらなかった（「売女」というのは、おそらく母親との比較で）。そうすると、“水に飛び込み”という勧告は、従妹の方に由来するものとしか考えられない。なにしろ彼は、悪い焦がれる不幸な男だったのだから。（記.114-5）</p>	-	省略	父への喪、湖に飛び込む自殺觀念、従妹の愛と死の願望

表10 第 39 セッション（1907 年 12 月 27 日）

診療録	公開された論文	比較	テーマ
<p>あらためて訂正することから始まった。彼が友人に自責の念を打ち明けたのは 1902 年の 12 月である。1 月に試験を受けたことだったが、これは彼の思い違いで、そのときはまだ所定の試験期間ではなく、試験はようやく 1903 年の 7 月になって行われたのである。（記.116）</p>	-	省略	試験の受験と自責の念

<p>春には、すさまじい画責（何に由来するか?）。話の詳細からその説明はつく。彼は突然ひざまずき、信仰心を引く張り出して、あの世と魂の不死を信じようと心に決めた。つまり、何を意味しているのかといえは、徒弟を「完女」呼ばわりした後で、キリスト教に目覚め、ウンターラッハの教会に通うようになった、ということである。父親は決して洗礼を受けようとはしなかったが、祖先がこのいましいおとめを彼から取り除いてくれなかったことを大変遺憾に思っていた。彼がキリスト教徒になるつもりなり、邪魔立てするつもりはない、と父親は彼によく言っていた。</p> <p>「すると、そのころ徒弟のライバルになるようなキリスト教徒の少女がいたのでは?」</p> <p>「いええ、いませんでした。」</p> <p>「ええ、しかも敬虔なユダヤ教徒です。」(記.116)</p>	<p>画責の念と信仰への目覚め（ユダヤ教徒なのにな?）</p>
<p>彼が洗礼を受けたなら、ザボルススキー一家の計画はすべて水泡に帰しただろう。すると、彼がひざまずいたのは、ザボルススキー一家の計画に対して向けられた行為であるにちがいない。だから彼は、神の前にひざまずく以前にこの計画を知っていたのだ。そんなことはないとは彼が言うが、確かな記憶があるわけではないことは認める。彼がはつきり覚えているのは、その計画の結末についてである。彼は、将来の義弟となる（とともに従弟でもある）ヤコブ・F Jakob F と連れだって、ザボルススキー一家を訪れた。そこで計画の検討がなされたのだが、それによると、ゆくゆくはF が弁護士となり、彼がその試補となつて、食肉市場の近くに事務所をかまえる、というものだった。そのときF が彼をひどく侮辱した。話の最中で、F が「いいか、今からちゃんとお前が準備しておくんだぞ」と言ったのである。(記.116-7)</p>	<p>ザボルススキー家の結婚計画、自分の将来像と従弟からの侮辱</p>
<p>つづいてこんな話が出る。1903 年の春は勉強に身が入らなかった。スケジュールは立てたのだが、実際に勉強したのはもっぱら晩で、12 時から 1 時までだった。さらに彼は勉強時間を延ばし、何時間も読書に費やしたが、何も得られなかった。ここで彼は、1900 年頃だったが、もう一つして自慰はしなむと誓いを立てたことがあり、それが憶えているかぎり唯一の誓いであるという話をはさむ。他方でそのころ、読書のあとで玄関の間とトイレに灯を明々ともし、裸になり、姿見の前に立つて自分を上げと見つめることがよくあった。自分のベニスがあまりに小さいことをいつも気にかけていたのだから、そんなことをしていると、ベニスが幾分なりと勃起してくるで安心した。ときに股間を手鏡に映してみることにさえした。加えて、そのころ彼はよく次のような思い込みに陥まされた。アパートの廊下から誰かが自分の部屋をノックしている、入りたがっているのは父親だ、ここでドアを開けてやらなかったら、入ってはいけないのだと父親は判断し、再び立ち去ってしまっただろう、しかも父親は何度もやってくるのはノックする。こうしたことをずっと続けていたうちに、ついに彼はこれらの観念の病的性格に恐れをなし、"こんなことをしてはいけない" という考えがふりかかるといふ関連づけをもたしてこの病的観念から逃れたのだった。以上に述べられてきたことは、迷信じみた意図から、父親が 12 時から 1 時までの間に訪問することを期待し、勉強して最中に父親に会ええるようにと勉強時間を夜中にずらした。ところが、そこまでしてわざわざ独りになれた時間をやり、定かな時刻のあてもないまま、ひよとしてという気持ちで待ち受けた後で、彼自身が自慰の代替行為になることを考えたことを行ったのである。そうして父親への面当てをしたわけである。彼は、前者のことは認める一方で、後者については、子ども時代のおぼろげな記憶と結びついているような気がするのだが、はっきりとは思いませんと言う。(記.117-8)</p>	<p>夜中の試験勉強と亡き父親の再来</p>

示唆	省略	彼が夏前ヴィーンで彼女と別れた時、彼女が語ったある言葉を、彼は彼女が属する交際範囲から彼を遠ざけたがっているのだと解釈した。そしてそれを非常に悲しく思った。(著.239)	-	田舎に旅立つ前の晩、つまり 6 月の初めか中頃、コンリートと一緒に帰宅した従妹に旅立ちのあいさつを告げたとき、彼は従妹に無視されたと感じた。(記.118)	ウンターラッハに滞在していた最初の数週間、風呂場の脱衣場の壁の割れ目から向こうを除くと、若い少女の裸が見えた。覗き見されていると知ったら彼女はどんな気持ちになるだろう、と自責の念に苦しめられた。彼にしてはまともな話だったが、これにくわれたせい、他にあった目下の大事な話題がみんな消されてしまった。(記.118)
従妹との軋轡	少女への覗きと自責の念				

本症例をエディプス理論から考察しようとしたため、論文化の際にあえて扱わなかったのかも示れない。

第 2 に、お針子（定期的な性的関係を持った女性）や従妹（恋人）に関する内容が省略されている。たとえば、「お針子との関係」(#31、#34)、「従妹からお針子への愛情の変遷」(#33)、「お針子との性交とねずみ」(#30、#35) などである。こうした患者の女性関係に関するテーマが省略されている点は先の研究でも指摘した(佐藤・鏑、2004a, 2004b)。扱わなかった理由として、症例理解に直接つながらないテーマと判断されたのか、あるいはプライバシーに配慮したのかなどが考えられる。

第 3 に、患者の報告した夢が省略されている。たとえば、「造語 WLK を伴った夢」(#31、#32)、「大尉の夢」(#32)、「父親を非難する母親の夢」(#37) などである。夢が省略されているのは、先の研究においても指摘した(佐藤・鏑、2004b；鏑・佐藤、2005b)。

第 4 に、性交とねずみのイメージが省略されている。たとえば「お針子との性交とねずみイメージ」(#35) は重要なテーマであると思うが、これを論文で扱うと、大尉から聞かされた残酷なねずみ刑の話が背景に退いてしまうことも考えられる。

第 5 に、自殺観念や自責の念が省略されている。たとえば、「お針子への後悔の念」「自殺と死の観念」「湖に飛び込む自殺観念」(#38)、「試験の受験と自責の念」「呵責の念と信仰への目覚め」「少女への覗きと自責の念」(#39) である。とくに #38 のお針子の自殺のエピソードについては、公開された論文では強迫神経症者の愛と憎しみの全能感として取り上げられているものの、罪悪感の側面は扱われていない。

こうした省略点に対して、公開された論文でも同様に取りあげられていたり示唆されている

ものとして、父親に関するテーマがある。たとえば、「父親のがさつさ」「父親の求婚話」「父親の性格」(#30)、「父親の墓とねずみのような動物」(#35)、「両親の結婚に至る背景」「夜中の試験勉強と亡き父親の再来の空想」(#39)などである。両親の結婚話については、父親の結婚相手の選択問題が患者にも同じように影響を与え、発病によってその葛藤から免れているという理解がなされている。また、患者が夜中試験勉強をしているときに亡き父親が再来するという空想については、あからさまな自慰を伴っていることから、父親との愛憎の葛藤を示すエピソードとして用いられている。こうした父親との関係は公刊された論文ではエディプス理論から考察されており、論述の中核をなしている。ただ一方で、「父親の自分勝手な性格」(#37)が省略されていたり、「父親の性格」について肯定的に示唆されている点など、その内容は取捨選択されており、がさつで荒っぽいが率直で気立てがよいという肯定的な父親像をフロイトは描きだそうとしているようにも思われる。

最後に、変更点としては、実名が匿名に変更されたものがある（「ザボルスキー家→親戚」(#30)、「ランツァー家のお針子」→「ハイ・ミス」(#38)）。この変更は当然、フロイトが患者のプライバシーを配慮したものだろう。

また、フロイトの解釈により公刊された論文の表現が強調された点がある。たとえば#30のセッションでは、フロイトの娘の両眼が「二つの汚物のしみに置き換わっている姿」を患者がみたとされているが、公刊された論文では「二つの大便を付けて」といってされている。これは「便＝金」であり、患者が金目当てにフロイトの娘との結婚を狙っているという解釈を際立たせるために、汚物のしみが大便に誇張されたのかもしれない。#35のセッションでは、ねずみ

のような動物が父親の墓のそばを走りすぎるのを見て、「父親のところに食事をしにやってくるらしい」と患者が推測したとされているが、公刊された論文では「ちょうど父親の死体を食いあさってきたところだと思った」とされている。一種フロイトの想像力の産物といえるが、患者の父親に対する憎悪のエピソードとしてフロイトが理解したいがために、ネガティブなイメージが付与されたようにも思われる。

注

- 1) Sigmund Freud Originalnotizen zu einem Fall von Zwangsneurose. *Gesammelte Werke Nachtragsband Texte aus den Jahren 1885-1938*, S. Fischer Verlag, 1987, S. 505-569.
- 2) *L'Homme aux rats Journal d'une analyse* (Text allemande reproduit et établi, introduction, traduction, note et commentaire par Elza Ribeiro Hawelka), P. U. F, 4e édition : 1994
- 3) Freud, S. (1909) : Adendum: Original Record of The Case. Translated by Strachey, J. & A. *The Standard Edition of Psychological Works of Sigmund Freud Vol. X*, 255-318.
- 4) 先に述べたように、北山（監訳）・高橋（訳）も邦訳の脚注のなかでセッションの内容と公刊された論文との対応関係について指摘している。とくに第7セッションまでの邦訳の脚注には、公刊された論文にも内容が逐語的に再現されていることもあり、両者の対応関係については詳しく言及されている。ただしあくまでも邦訳作業の過程のなかで行われているため、第8セッション以降、全体のセッションを通じて両者の対応関係がどのようなものか論じられるまでには至っていない。

文献

- 「ねずみ男」精神分析の記録 北山修（監訳）高橋義人（訳）（2006）人文書院、8-153
- 強迫神経症の一症例に関する考察 小此木啓吾（訳）（1983）フロイト著作集9、人文書院、213-282
- 佐藤淳一・鍾幹八郎（2003）：フロイトの症例「ねずみ男」に関する考察（Ⅰ）－診療記録の翻訳の

- 試みおよび公刊された論文との対比. 京都文教大学大学院臨床心理研究紀要／研究編, 創刊号, 117-130.
- 佐藤淳一・鏑幹八郎 (2004a): フロイトの症例「ねずみ男」に関する考察 (Ⅱ) - 診療記録の翻訳の試みおよび公刊された論文との対比. 京都文教大学大学院臨床心理研究紀要／研究編, 2, 115-124.
- 佐藤淳一・鏑幹八郎 (2004b): フロイトの症例「ねずみ男」に関する考察 (Ⅲ) - 診療記録の翻訳の試みおよび公刊された論文との対比. 京都文教大学大学院臨床心理研究紀要／研究編, 2, 125-133.
- 鏑幹八郎・佐藤淳一 (2005a): フロイトの症例「ねずみ男」に関する考察 (Ⅳ) - 診療記録の翻訳の試みおよび公刊された論文との対比. 京都文教大学大学院臨床心理研究紀要／研究編, 3, 65-73.
- 鏑幹八郎・佐藤淳一 (2005b): フロイトの症例「ねずみ男」に関する考察 (Ⅴ) - 診療記録の翻訳の試みおよび公刊された論文との対比. 京都文教大学大学院臨床心理研究紀要／研究編, 3, 75-84.